

いえるかと思う。これに対してFは、完全に外向的であるとはえないかもしれないが、一応明るくおしゃべりで人づきあいがよい点、まず外向的な傾向に属していると見られるであろう。そして、Fの方は子ども自身が、自尊心よりも劣等感の方をはっきり意識している。かえって自分の劣っていることを口に出してそれで人を笑わせ、自分を慰めているような「道化もの」の傾向を幼いながらに見せているのである。このFのような子に自信をもたせ落着かせることはNの場合よりは困難であると考えられる。そして、知能は決して劣るものではないにしても、実際に生活者としての能力は劣るといわなければならないこともみとめなければならない事実である。

幼児の中には、非常に高い知能をもち、しかも素直で活発でわきまがあらながら少しも余計な意識や評価にわずらわされない、本当に好ましい Personality の者も、少数ではあるが存在する。してみれば、環境の条件をよく整えれば最も好ましい成長が可能なのであり、知能のすぐれた子を自意識の犠牲にすることもさけられるといえる。知能と自意識との相互に関連深い発達は、さきにも述べたように発達それ自体の当然のなりゆきとしてもみられると同時に、その子をめぐるおとなたちの自意識の押しつけや誘発も相当な因子として考えられる。子どもの教育に当って（自意識に関連して）見せかけの能力については常に再考の必要があり、また真の能力の正当な成長を阻害しないための心づかいが重要なことなどについて、注意すべき点をいくらかでも明らかにしたいとつとめた。

なお幼児期においては、知能と自意識とは、ほぼ正比例するが、児童期の終りから思春期にかけてはしばしば、反比例する例もあると思われ、その間の事情に対しても調査検討をづけたい。

幼児指導のための

パーソナリティの一調査

北海道教育研究所員 小林 幹 夫

一、研究のねらい

幼児指導にあたって、幼児をどうみることがいかに重要であるかをここ数年來研究をつづけた。前回にひきつづいてパーソナリティの面から幼児の実態をとらえること、とくに今回教師側の幼児の性格、行動の観察を取上げ、望ましい指導に役立てるために、種々の問題を考察した。

二、調査の対象と実施経過

北海道の三つの地区から、それぞれ施設を選んで大略次のように調査をすすめた。

第2次 調査報告分

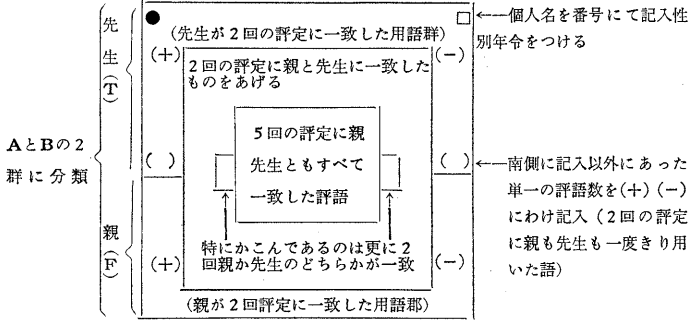
(略称)	施設	(対象人員)	(先生)	(調査期間)	(調査種目)
(I)	小学二年 美唄市々立美唄小学校	一年生七名	八	三年四月、六月	家庭・一式・二式
(II)	A 施設 函館市々立函館幼稚園	全園児七名	七	三年四月、五月	家庭・一式・知能
	B 施設 札幌市私立発寒幼稚園	全園児五名	四	三年三月、五月	家庭・一式・二式

本報告においては、それぞれの施設名と略称をもって示してある。

三、調査方法

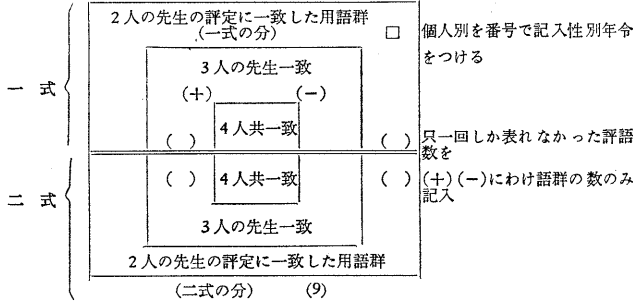
大体は前回とほぼ同様の方法を用いた。中心をなすのは観察をチエックリストによって記述する方法である。評定用語は、前年度のもの或少々改良したものを一式と呼ぶ。これに補足的と比較研究のため阿部孫四郎氏性格調査法による実態性格評定用語を、そのまま利用させていただき、二式と略称する。

第一表 性格記入法 (A)



備考 評語の一致度の高いもの順は下のごとし
 (1) 中心小わく内 (2) 準小わく (3) 大わく内 (4) 外わく内特に大わくに二重わくにしたものは大わく内がすべて (2) に該当するもので、その場合の (3) のものは二重わくにはみだし、小わくでかこんで示してある。

第二表 性格記入法 (B)



第三表 評語選択数の分析表

	人員	親		先生		共通	合計	
		\bar{X}	S. D	\bar{X}	S. D	\bar{X}	\bar{X}	S. D
幼稚園児	906人	21.5	10.8	16.5	9.4	6.9	37.2	11.7
小学一年	372人	16.6	10.5	6.1	3.4	1.3	21.3	10.1

その詳細は前回の発表並びに次のものを参照されたい。
 [註] 「一式」北海道教育研究所紀要第十七号人格研究一九五六「二式」性格調査法(阿部孫四郎著)ミネルバ書房刊一九五〇
 チエックリストを用いての記入法は一例として次の第一表のA法
 第二表B法として、参考まであげてある。

A法はそれぞれのクラスの担任の教師が家庭と協力し一人一人の幼児についての観察記録である。B法は同一の施設の中で何人かの教師の協力のもとに教師相互に実施されるものである。

とくにB法のためには報告者自身でB施設を定員五十名にし教師四名をあてて運営指導にあたった。今回の報告には、昭和三十年を、方法を徹底させるための準備期間とし、翌三十一年に調査実施したものを述べてある。

四、結果の考察

前回では主として親と教師の同一の幼児についての性格の評定に著しい違いがあること指摘した。それを小学一年についてさらに確かめた。一例として次の上表によっても明らかである。

さらに種々検討の結果(前出研究紀要十七号参照)幼稚園教師と小学校教師の幼年者の性格評定の問題、ひいては個々の教師の性格評定における問題点が指摘されるにいたっ

第四表

(I) 小学1年 (昭和31年実施)

教師名	A	B	C	D	E	F	G	H	平均	
	♀	♂	♂	♂	♂	♀	♀	♀		
受持児童数	46	55	43	52	46	45	41	45	466	
項目平均	一式	3.5	4.7	8.2	4.9	8.9	58.	8.3	4.9	9.2
	二式	2.6	4.5	5.8	1.9	4.6	1.6	2.9	2.9	3.2

(II) A 施設
第1回 (昭和30年6月)

教師名	A	B	C	D	E	F	G	平均
受持幼児数	11	27	27	28	33	29	31	26.6
項目平均	12.3	14.6	9.0	15.9	16.8	26.0	16.4	15.0
一式								

第二回 (昭和31年2月)

教師名	A	B	C	D	E	F	G	平均
幼児数	11	27	26	19	29	24	32	24.0
項目平均	16.4	11.6	13.5	13.7	22.8	23.0	15.5	16.6
一式								

(III) B 施設
(昭和32年2月実施)

教師名	A	B	C	D	平均	
性令	♂ 34	♀ 23	♂ 20	♂ 32		
幼児数	各同 40名対象				40	
項目平均	一式	22.6	35.6	24.7	15.4	24.6
	二式	9.9	14.7	9.7	6.2	10.1

学校の男
として
とIの小
をみる

た。今回の報告において、其の第一は、代表値を十九人の教師ごとに、評語選択頻度の平均に置いて見た場合の第四表の資料に明示される。第二は二式による評定者側で阿部氏のいう補填緊張 (Compensatory tension) が行われたと見ての考察より整理された資料から、第三には報告者考案のB方法によってクラスターの表示と一人の幼児について四人の教師で評定するので、さらに加えて一式二式に同義語十八を捜入しての信頼性の検討により性格評定における教師側の問題点が提示される。(紙面の都合で第四表のみで第二・第三の各資料は略す)

それらの分析資料の中から、考察に必要な結果の主なものを選抜教師別性格評定語選択頻度平均比較表

教師と女教師とにわけ二式をつかって評定用語の選択数頻度を用語ごとにとつて両者の相関係数の検定をすると○・○一の有意水準で帰無仮説が棄却される。幼稚園教師と小学教師との間の評定の場合も、(III)のB施設の教師間の一式二式の共通度の検定においても相関が認められない。すなわち、教師間の性格評定の違い、極言すれば教師個人間の幼児の見方における独善性が浮かび上がることがけねんされるものである。パーソナリティの把握の際に留意せねばならぬ評定は(I)の調査では、最も注意すべき顕著なものは「あけっぱなしの子」ついで「あつさり」「せっかち」などの属性があげられる。(II)B施設では「信じやすい性質」の実態のつかみ方に問題がある。(III)A施設では「おしゃべり」「無口」「くちべた」の特性などに種々の観点をあたえている。前回もあわせて、全般としての傾向には、指導に意をもちいねばならぬ第一観点は「自分のことを自分でする」といった自主性をつちかう必要が強調されることである。家庭と施設で評定の一致が少い子、反対に性格図に評定語が極端にあらわれすぎる子、正と負で両極の特性群を見せる子などが指導上問題となる。それらの点が考察の主なものである。

五、むすび

いやしくも保育者として受持の幼児と日頃生活を共にしているながら、一人一人の幼児の性格を充分つきとめないままで望ましい指導など許せるものでない。幼児を把握したつもりが、教師自身の独断とか、観る側の態度がプロジェクトされ、余程うまい手だてを用いない限りは、指導のためにさまたげになることが多い。かようにパーソナリティの把握だけでも大変な困難点がある。

そのために、報告者の考案のA法B法が活用次第で随分効果的である。またそれにより指導上教師が心得ておかねばならぬ諸点も明確にされた。次回にはさらに具体的にその指導の効果を追究し調査の報告をより完全にするつもりである。

保育者におけるパーソナリ

ティー・インヴェントリー

による性格の類型的研究

幼稚園教員適性検査作成のための基本的研究

栄光幼稚園 日名子 太郎

立教大学 多 勢 豊 次

一、本研究の目的

幼稚園教員適性検査作成への基礎的研究の予備段階として、保育者を志望するものが、一般人と比較してどのような特性を有するかを、性格類型的、知能的に調査し、今後の問題について考えようとするものである。

二、調査の対象

都内保育関係短大並びに神奈川県内短大付属幼稚園教員養成所学生約二〇七名。

三、調査の方法

①性格類型的の研究には「精研式パーソナリティー・インヴェント

第一 表

類型	校別	校別			Total	標準
		B	A	C		
純 型	※S	4.3%	3.8%	7.0%	7.0%	7.9%
	※Z	11.6	11.5	21.0	15.4	10.3
	※E	5.8	9.6	7.0	7.0	8.3
	※H	5.8	1.9	2.3	3.3	5.3
	※N	5.8	1.9	5.8	4.8	5.9
混 合 型	SZ	0	0	1.1	0.5	0.7
	※SE	1.4	0	5.8	2.9	2.1
	※SH	2.9	0	1.1	1.4	1.4
	※SN	1.4	0	1.1	0.9	1.6
	ZE	4.3	3.8	1.1	2.9	0.9
	※ZH	4.3	0	2.3	2.4	2.4
	ZN	0	0	0	0	0.6
	EH	0	0	0	0	1.1
	EN	0	1.9	0	6.5	0.9
	HN	1.4	1.9	0	0.9	1.0
	無 型	M(大)	13.0	28.8	25.6	22.2
M(小)		37.7	34.6	18.6	29.0	45.3
(M)		(50.7)	(63.4)	(44.2)	(51.2)	(49.7)
人員	Z	69人	52人	86人	207人	700人

※印は類型とみとめられるもの (精研佐野氏他による)
ただし M(大)は三つ以上の類型の複合したもの
M(小)はすべてが20%以下のもの

リー」
③知能検査には「桐原式一般知能検査」を使用する。
四、調査の結果
①性格類型に関して
①各調査校と一般標準との比較(第一表)
純型S、Z、E、H、Nに属するものは、標準、保育者両グループ共に約36%程度、混合型SZ……等は約13%を占め、さらに無型Mが約50%で、この両グループ間に差が認められない。